はじめに

島崎藤村は、木曽馬籠をふるさととし、近代詩・自然主義文学・歴史小説を極めた日本文学を代表する作家のひとりです。

特に生涯を通じて花袋との親交は深く、中でも藤村の『破戒』・花袋の『蒲団』は日本自然主義文学を確立した作品となりました。

本展示は、開館記念特別展として花袋と最も親交の深かった島崎藤村の生涯と文学的足跡を通して、自然主義文学確立の背景と近代文学発展の過程を理解していただこうと開催しました。

特別展開催にあたり馬籠の藤村記念館、小諸市立藤村記念館より多大なるご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

昭和62年7月18日

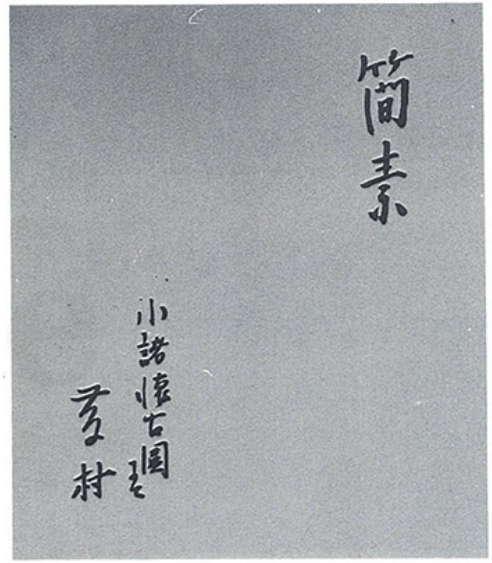
館林市教育委員会

島崎藤村

明治5年（1872）2月17日、現在の長野県木曽郡山口村馬籠の旧家に島崎正樹・ぬいの四男として生まれた。本名は春樹。

明治14年（1881）長兄に伴われて上京。その後明治学院に入学し、西欧の思想や文学に触れる。明治学院卒業後、北村透谷、星野天知らと交わり、明治26年文芸雑誌「文学界」の創刊に加わり浪漫的詩歌を発表する。この頃、田山花袋や国木田独歩らと親交をもつようになり、やがて小説家を志す。明治39年『破戒』を発表し、自然主義文学の確立へと導く。昭和10年大作『夜明け前』を完成し、日本の歴史小説を代表する作品となった。昭和18年（1943）71歳で没す。墓は馬籠永昌寺ならびに神奈川県大磯の地福寺にある。

この他おもな作品として『若菜集』『落梅集』『千曲川のスケッチ』『家』『春』『新生』などがある。



島崎藤村の書

Sample

島崎藤村 ―そのおいたち―

ふるさと馬籠

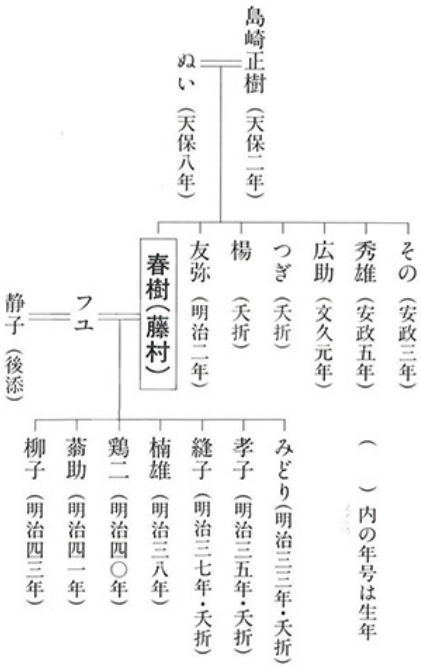
藤村のふるさと馬籠は、木曽・飛騨の両山脈に挟まれた細長い渓谷に位置し、江戸時代までは中仙道の宿場町として栄えた。

島崎家は、その本陣・問屋・庄屋を兼ねた旧家であったが、明治維新後、宿駅の廃止、交通路の発達などにより馬籠はその機能を失うとともに、その家運も傾きかけてきた。

さらに山間地特有の生活条件の苛酷な土地柄でもあり、厳しい自然風土と時代背景は、作家島崎藤村に大きな影響を与えた。

馬　籠

島崎家系図



父 島崎正樹

父 正樹小説「松か枝」

詩人からの出発

明治14年（1881）、藤村は長兄秀雄に伴われて上京した。最初政治家・実業家を志したが、明治20年、英語修得の目的で入学した明治学院在学中、キリスト教にもとづく西欧の思想や文学に触れながら、自らも文学をめざすようになった。

明治学院卒業後、明治女学校、東北学院の教師の職につく。その間、明治26年の北村透谷・星野天知らの「文学界」の創刊に加わり、詩文を中心とした作品を発表する。やがて「文学界」は浪漫主義文学の拠点ともなり、多くの作家を生んだ。中でも抒情豊かな藤村の詩文は新しい近代詩の夜明けを告げるものであった。

また、藤村と花袋が出会ったのも「文学界」がきっかけとなり、この時期、若い作家たちが新しい文学に目覚めはじめた時であった。

明治21年　明治学院在学中の藤村（15歳）

「女学雑誌」
明治18年創刊。巌本善治主宰の文芸雑誌。藤村がはじめて翻訳文を載せた雑誌である。

「文学界」
明治26年創刊。「女学雑誌」編集にたずさわっていた星野天知、北村透谷、平田禿木、藤村らが新しい文学発表の場をめざして創ったもの。明治31年終刊。

藤村の詩集

詩人として文学の道を歩み出した藤村は初期の頃、『若菜集』(明治30年刊)『一葉舟』(明治31年刊)『夏草』(明治31年刊)『落梅集』(明治34年刊)の４つの詩集を発表している。

中でも有名なのが『若菜集』で「文学界」に発表した詩の51編が掲載されている。75調の定型詩が大部分を占め、恋愛詩・叙景詩・叙事詩等に分かれ、「初恋」「草枕」などが代表である。

『落梅集』は藤村が小諸へ赴任した後に発表された詩集であり、叙景詩を中心としている。「千曲川旅情の歌」はその代表である。

『若菜集』(明治30年刊)

『落梅集』(明治34年刊)